

活動を広げる・深める・おもしろくする

NPOを率いる市民活動家の遠矢家永子さんと生涯学習論・成人教育方法論の研究者 三輪建二さん。初顔合わせのお二人に、活動を展開していくうえでの学びあいや協働について語りあっていただきました。

◇^{とおやかえこ}遠矢家永子^{シーン} NPO法人SEAN理事長・事務局長
◇^{みわけんじ}三輪 建二 お茶の水女子大学文教育学部教授

家庭教育学級、婦人学級からスタートした活動

三輪:早速ですが、遠矢さんが活動を始めるきっかけは何だったのですか？

遠矢:私はあまり深く考えずに専業主婦になり、出産後は子育てに明け暮れていました。上の娘が小学校入学時に、家庭教育学級の運営委員を引き受け、人権や環境・平和など真面目な話を真面目に考えられる場を得て、とてもおもしろく感じました。1994年ごろの高槻市では、家庭教育学級の運営委員は任期を終えると婦人学級を立ち上げるよう勧められました。「補助金が貰えるのだし、自分たちの気づきを深める学級をやろうよ」と呼びかけたら、真面目なことを真面目に話すことが楽しいという仲間が集まってきたので、SEAN結成のきっかけとなった「かまどねこの会」を立ち上げました。ですから、SEANは地域のPTA仲間のつながりの延長線上で生まれたわけです。

三輪:SEANの活動は、保育、出前授業、調査研究など多彩ですが、これだけたくさんの活動を最初からやっていたのですか？

遠矢:「かまどねこの会」では、年10回程度の学習会を開催していました。でもみんなの生き方が変わらない。知識は得たけど、夫との関係も自分の生き方も変わらず、かえって葛藤の中で生きづらくなっていく人も出てくるという状況でした。

1997年ごろ、学習会に子連れの参加者が増えてきたのをきっかけに「ネットワークステーションとんがらし」を主宰して保育サポート事業を始めました。同時並行で始めたCAP(子どもへの暴力防止プログラム)活動からは、ジェンダーを避けては進めないとの思いを強めました。何かやってみると課題が見えてきて、それについてさらに何かやりたいと言えれば仲間が集まってくる。誰も反対しないので、今では“政治参画”も“まちづくり”もと言っています(笑)。メンバーは事業ごとでタイプが違い、サポート部門「とんがらし」は大半が地元での活動ですので、高槻市内の人たちが集まってきます。教育部門「G-Free」はファシリテーター養成講座を入り口に加わった人たちが中心で、大阪府や滋賀県など広域から集まってきます。ほかに会趣旨に賛同して会費で支えてくれる人もいます。

三輪:SEANの会員数は、233名(2007年度)とかなり大きな組織ですね。事業によって担う層が違う中で、お互いが全体を知りながらそれぞれの活動をする仕掛けのようなものがあるのですか？

遠矢:多様性があるので、お互いに影響しあうことができます。「とんがらし」のワーカーは、人の役に立ちたい、ある程度のお金を自分で稼ぎたいという人たちが主で、ジェンダーについて学びたいという思いからの出発ではないです。1階が事務所・2階が保育室で、「とんがらし」ワーカーが主に事務所の電話当番を担当しているので、「G-Free」や調査研究のスタッフ会議が開かれる事務所にいると、自然と情報が耳に入っていくようです。一方、「G-Free」スタッフはジェンダーを伝えたいという熱意をもってしています。私も、メール通信で、かなり思想的なことも含めてSEANの

対談風景▶
於 国立女性教育会館
2008.8.31



考えを発信しています(月1~2回)。いろいろな人が自分たちの思いを押しつけない形で共存しているの、皆さん居心地がいいみたいです。

共通理解を生み出す仕掛けは、押し付けないこと

三輪: 会員間の細かいところでの意見の違いについてはどう理解しあうのでしょうか？

遠矢: 個々の意見は違って当たり前ですが、組織の方向性を決定するには合意を得ます。「ジェンダーはあかんよね。とらわれることは抑圧を生むよね」と共通理解しているけれど、「今日は夫が帰ってくるから急いで帰らなくちゃ」というのは、その人の自己決定だと理解し、それぞれの立ち位置での考え方を非難することはしません。

三輪: SEANでは中学生対象のワークショップをやっておられますが、ゆっくり彼らの本音を引き出しながら、伝えたいことを伝えておられる。グループの中で多様な意見を認めながらの共通理解が、ワークショップなどの伝え方に反映しているんですね。

「協働」は多数派になるための智恵

三輪: 私は「おとなの学び」に関心があるのですが、おとなの場合は生まれ育つ中で身につけた価値観がしみついていて、そこから出発しないと次には進めません。そこに男女共同参画を本当に理解する難しさもあります。多様性を認めるという価値観が組織運営や議論の仕方に出てくるお話がうかがえて嬉しいです。お互いを認めながら方針を共通理解していくのは、行政に向かうときも同じですか？

遠矢: 行政との協働については、子ども部、市民協働のコミュニティ推進室、男女共同参画課、そして障害をもっている子どもたちともかかわっているので障害福祉課・・・といろいろな部署とのかかわりがあります。「行政はわかっていない」とよく言いますが、NPO側の人も状況は同じです。ですから、わかっている者同士でコラボできたらうまくいくわけですね。実際には市民が行政に「何もわかってへん」、行政も「文句ばかり言うのが市民や」と悪い方ばかり指摘しがちです。わかっている者同士が少しでも前進させようとしたどり着いたのが「協働」という考え方だと思います。

三輪: 今はどんな団体と連携しているのですか？

遠矢: ロビー活動などもやりながら食育とか介護の安否確認も含めた配食サービスを高槻市の中で根づかせた「いきいき会」、子どもの人権について理解しあえる「三島子ども文化ステーション」(元親子劇場の人たち)などです。NPOは自分たちの主義主張にこだわるあまり、互いに手をつなぎにくいのですが、単独ではどんなにがんばっても少数派から抜け出すことはできません。政策にはならないし、市民権を得ることもできません。SEANは“人の命”というところでつながっていければ、多数派になることも夢ではないと思っています。

三輪: NPO間のネットワークでは、会合を一緒にもっているのですか？

遠矢: 市民公益活動サポートセンターの管理運営委員会のような場で集まり、連携しています。具体的な取組となる「たかつきNPO協働フェスタ」も今年で第4回を迎えます。以前は市コミュニティ推進室が単独で企画したフォーラムを開催し



◀ 遠矢 家永子 (とおや かえこ)

特定非営利活動法人 SEAN (シーン) 理事長・事務局長。
その他、高槻市市民公益活動サポートセンター管理運営
委員会常任委員、(社福)大阪ボランティア協会評議員、
高槻市行財政改革懇話会市民委員、CAP スペシャリスト

ていました。代わり映えのしない企画だったので、私が「基調講演とNPOによる協働事業のプレゼンテーション」を企画立案し、2回にわたりその企画が実現しました。当初、市側は「公募で選ばれなかった団体だけでなく、プレゼンした団体もシミュレーションの提案で終わり具体化しないと、文句を言うのではないかと」消極的でしたが、「NPOは実践者ですから、もっと物わかりはいいはず! やりましょう!!」と開催に踏み切り、苦情もきませんでした。3年目に高槻市協働活性化モデル事業として協働提案には具体的に補助金が出るようになったので、同じく私が企画立案し、NPOや協働を啓発するようなお祭である協働フェスタの開催となりました。

三輪: 遠矢さんは組織の中でもNPO間でもコーディネート役をしていると思いますが、NPO間をつなぐことで大事にしていることがありますか。

遠矢: SEANは中間支援組織ではないし、私はコーディネーターという意識はもっていません。当事者の発想で、自分たちの活動がより地域に根ざし、多数派になっていくためにかかわっています。男女共同参画を広げるために「そんなものは…」という人たちとも仲よくしたいと思いますし、女性がリーダーシップを取る姿を具体的に見せて「なかなか女もやるなあ」と思わせることも大事です。

◀ 個と個、グループとグループ、

つながっていくことで改革できるんです

三輪: エンパワーメントとは、自分の中に本来あるこれまでは虐げられてきた力を出して行こうよというメッセージなのでしょうね?

遠矢: 活動の中で人生を自らの手に取り戻し可能性が広がったとき、「私にも案外できることがたくさんある」と気づき、エンパワーしてきたという実感があります。小さな自己選択の積み重ねが、個々のエンパワーにつながって、そのパワーが結集され組織になって、さらに可能性が広がる。そうすれば社会変革だって夢ではないと思います。

三輪: 政治の力で変える方法もありますが、個人がグループをつくり、グループがグループをつくっていくことが改革につながるのですね。

遠矢: 私が行政との協働にこだわるのは、活動が税金を財源とする“施策”となるからです。協働すれば単独でやる以上に、市民権も得られます。ただ実際には行政と課題を共有するのは難しく、特にマイノリティの人たちの人権は行政施策の中で課題になりにくいですね。行政では対応しきれないようなシングル親の家庭や発達障害児の家族のサポートを、私たちが自前でカバーしているというのが現状です。

▶ “体験の語りあい” が道を拓く

三輪: 日本女性学習財団では実践的な力量形成の方法として、自分の体験を語るラウンドテーブルを提案しています。語る体験を通して自分の活動の意味を整理することもできますし、違う分野のNPOにも共通する課題があることに気づいて、お互いから学ぶことが実践の力をつけていくうえでかなり大事だと考えています。

遠矢: SEANの場合は、事務所に集まって楽しくおしゃべりしているのがそれに近いのかなと思います。活動で悩んでいても、必ず道が開ける瞬間



◀三輪 建二 (みわ けんじ)

お茶の水女子大学大学院文教育学部教授。専門は生涯学習概論、社会教育学、特に成人の学習論、成人教育方法論。専門職の力量形成を支える組織として専門職大学院構想に着手している。『ドイツの生涯学習』（東海大学出版会、2002）、翻訳『おとなの学びを創る』（P.クラントン著、風書房、2004）、ドナルド・ショーン著『省察的实践とは』を翻訳。

は出てきます。誰かに発信していくと必ず情報が舞い込んでくるので、自分の中で完結してしまわないようにしています。一人で煮詰まってしまうことって案外多いですが、相手の考えや事情は聞いてみないとわからないし、自分が一歩踏み出してみないことには前には進みません。スタッフともよく話すのですが、“できる”という言葉で“完璧に”ではなく、“一歩踏み出す”こととしてとらえ直していくといいですね。

「次世代」を育てていくためにも、自分の実践を語りあえるような時間と場を

遠矢:三輪さんはNPOの問題に関してどんな関心がありますか？

三輪:NPOの内部では、新人とベテランとの乖離があると思うのです。私は、事例検討会をNPO内部ですればいいと思っています。ただそのとき、ベテランが新人にアドバイスするというよりは、一緒に“ああだ、こうだ”と考えていくと、体験を語っていくことで若い人も力がつくし、同じ目線でお互いに力がつく関係にもなります。外部の講師から話を聞くよりも自分たちが抱えている問題を出しあい、意見交換をするラウンドテーブル方式のほうが、力がつくと考えています。遠矢さんたちは、それに近いことをされているので、さらに組織化して定期的にそういうことをしてみるといいのではないかなと思いました(笑)。

遠矢:10年ぐらい活動していると“堅苦しいことは今さらいいじゃない”という空気もあるので、軌道修正する難しさはありますね。

三輪:活動しながらでも見よう見まねで力はつき

ますが、それだけではなく自分の実践をふり返って語る場を用意しておく方がいいと思います。いい実践でも自覚していないこともあり、語ることで自覚することもあるので、次の人を育てていくためにはかなり大事な方法になります。

遠矢:語ることで自覚できるというのはすごく実感があります。ただ、真面目なことを語るのに抵抗感がある人たちにどうしたら語る場に来てもらえるかだと思います。

三輪:1つはざっくりばらんに自分の体験を語る場と、実践を理解するための勉強会の両方を設けること。2つ目は1回や2回ではふり返りはできないので、積み重ねていくことです。語って、少し勉強会にもかかわったりしているうちに、「エンパワメントというのは、自分が保育で子どもとかかわる中でのことなのかな」とピンとくる、そういう場面を経ると真面目なことを語るのが嫌な人も喜んで参加するようになるのではと思います。

遠矢:保育スタッフの養成講座ではエンパワメントやジェンダーも学習しますが、頭で考えていることと実践をつなげる必要があるということですね。

三輪:自分がやっていることがどこかでジェンダーとかエンパワメントという言葉と結びつく瞬間がないと“難しい”とってしまうかもしれません。

遠矢:そこをつなげていくような“語りの場”“共感の場”があれば、変わってくるでしょうね。

三輪:既にSEANではお互いに得たことを確認しあう仕組みをつくっておられるようですので、さらに実践の語りあいを充実させて、活動を広げていかれることを期待しています。